

# 神道について

越谷市立東中学校 加藤幸一

神道とは

日本民族の間に発生した古来の民間信仰が 外来思想である仏教・儒教などと対立し、しかも その影響を受けつつ発達してきた「神」を祀る日本固有の民族信仰である。

仏教--- シャカが インドで始めた宗教。仏(一般に)を祀る。

儒教--- 孔子を祖とする 中国の伝統的な政治・道徳の教え。孔子を祀る。

## 神道の歴史

「神道」という語は 奈良時代にできた「日本書紀」という歴史書の中 にはじめて出てくる。大陸から渡ってきた仏教に対して 日本の当時の 在来的な信仰を さしていた。わが国の古代信仰においては 初めは 自然物・自然現象を畏怖(おそれかしこまること、おそれおののいてそばに 近づけない気持ち)して これらを「カミ」とした。のちに 氏の上(氏の 一族を率いる氏の長老)に対する尊敬が 死後「カミ」として尊崇されたり、同一職業集団の祖や地域の開拓者に対する尊敬の念が「カミ」として 尊崇されたりする。なお 祖先崇拜は 神道本来のものともみられているが 大陸の影響によってもたらされたもの。また、「カミ」の語源については、 神道の立場で いろいろ説かれているが まだ よくわかっていない。

奈良時代から平安時代初期にかけて 日本古来の神を 仏教の仏と結び つけ、融合・調和した神仏習合の思想がでてくる。例えば 神は仏教を擁護するとして 有力な神社に 神宮寺と呼ばれる寺院が付属して置かれた。また、逆に「神は 人より上位であるが 仏よりはるかに下位で 人とともに煩惱になやむ衆生の一つ」として 神は仏法によって救済されるとか 神に 仏につぐ位である菩薩の号を付したり、神前で読経(お経を声を出

して読むこと)をおこなったりした。

平安時代中期になると「神と仏とは本来同一であり、本地(本身)はインドの仏であるが、衆生(人間を含め、この世の中に生きているすべてのもの)を救済するため、迹を日本に垂れて日本の神となって現われた」とする考えの神仏習合がみられてくる。この思想が本地垂迹説である。本地とは仏をさし、垂迹とは、仏が仮のおすがたの神として身を現わすことである。この本地垂迹説から、西部神道(真言神道)と山王神道(天台神道)が鎌倉時代になって伊勢神道の影響を受けて成立した。

鎌倉時代には、この神仏習合が本地垂迹説の仏本神従(仏が本で神がそれに従う)から神本仏従(神が本で仏がそれに従う)へと変化する。この神本仏従の神道としてあらわれたのが、伊勢神道(度会神道)である。

室町時代末期に、この神道をさらに発展して、反本地垂迹説を主張したのが、吉田神道(唯一神道)である。「仏教・儒教は花実枝葉である」としている。

江戸時代になると、儒教の立場から神道を解釈しようとする儒家(儒学者)による儒家神道がでてくる。儒家神道は、仏教をきらい、仏教排撃の立場から神仏習合を否定している。この儒家神道として、吉川神道や重加神道が代表的である。なお儒家神道の祖は、神儒一致説を唱えた儒学者、熊原権斎である。

この他、仏教・儒教の外来思想がわが国に流入して来まらない以前の古代の姿を探ろうとする国学者による復古神道が、儒家神道に置かれてみられる。復古神道は、儒教・仏教を排撃する神道で、国学者、平田篤胤によって完成した。平田篤胤の復古神道は、祭政一致(祭りと政治、すなわち宗教と政治が一致すること)の考えがみられ、後の明治維新政府に強く影響を与えた。

明治になると、神道は神社神道と教団神道とに二つに分類される。神社神道は復古神道の影響を受けたもので、明治新政府によって神仏習合的な流れは、ここにおいて一掃される。例えば、明治初年、神仏分離令が

出たこと。また これによって民衆の中に<sup>いんぼうしやく</sup> 廃仏毀釈(仏教に關係している  
 寺院・仏像・お経などを焼きすてたりすること)の<sup>ふうしやく</sup> 風潮がみられたこと。  
 そのうえ、祭政一致をめざして明治2年、<sup>ひまがみ</sup> 神祇宮を復活させ 神祇宮に宣  
<sup>きょうし</sup> 教使をおき 神道の<sup>ふしやう</sup> 布教をはかったり、神を<sup>まつ</sup> 祀る神社は国家の<sup>きょうし</sup> 宗祀(た  
 とんで祀ること)として<sup>あつか</sup> 扱われた。神社神道は国の<sup>しめきやう</sup> 宗教となったのである。  
 この神社神道は 宗教としてでなく むしろ国家道徳として<sup>あつか</sup> 扱われ 昭和  
 初期から「<sup>こくか</sup> 国家神道」と呼ばれるようになり、太平洋戦争の<sup>せんせん</sup> 敗戦の年(昭  
 和20年)まで 国家の大きな保護を受けていた。戦後、国家からの保護  
 からはなれると 神社を中心とする<sup>ちえん</sup> 地縁集団や、<sup>しゅうかり</sup> 宗敬者集団によって今日  
 まで続いている。

一方、<sup>きやうは</sup> 教派神道(神道十三派)は 神社神道とちがって <sup>きやうぞう</sup> 教祖がいて、  
<sup>きやうきん</sup> 経典があり、教会が建てられているもので 宗教的な神道である。これら  
 教派神道は13派みられ 今日まで続いている。すなわち、神道(今の神  
<sup>いんぼうしやく</sup> 道大教、教祖はいない)・<sup>くすつみ</sup> 神道修成派・<sup>くすつみ</sup> 黒住教・<sup>たいしや</sup> 大社教(今の<sup>いげん おかひら</sup> 出雲大社教)  
 ・<sup>ふじやう</sup> 扶桑教・<sup>しんじやう</sup> 神道実行教(今の<sup>たいせい</sup> 実行教)・<sup>たいせい</sup> 大成教(今の<sup>たいせい</sup> 神道大成教)・<sup>しんじやう</sup> 神道  
 神習教(今の<sup>しんじやう</sup> 神習教)・<sup>みちや</sup> 御嶽教・<sup>しんり</sup> 神理教・<sup>みぎ</sup> 禊教・<sup>こんこう</sup> 金光教・<sup>てんり</sup> 天理教(中山美  
 伎の創始)である。

## 事項補説

### 1. カミの語源

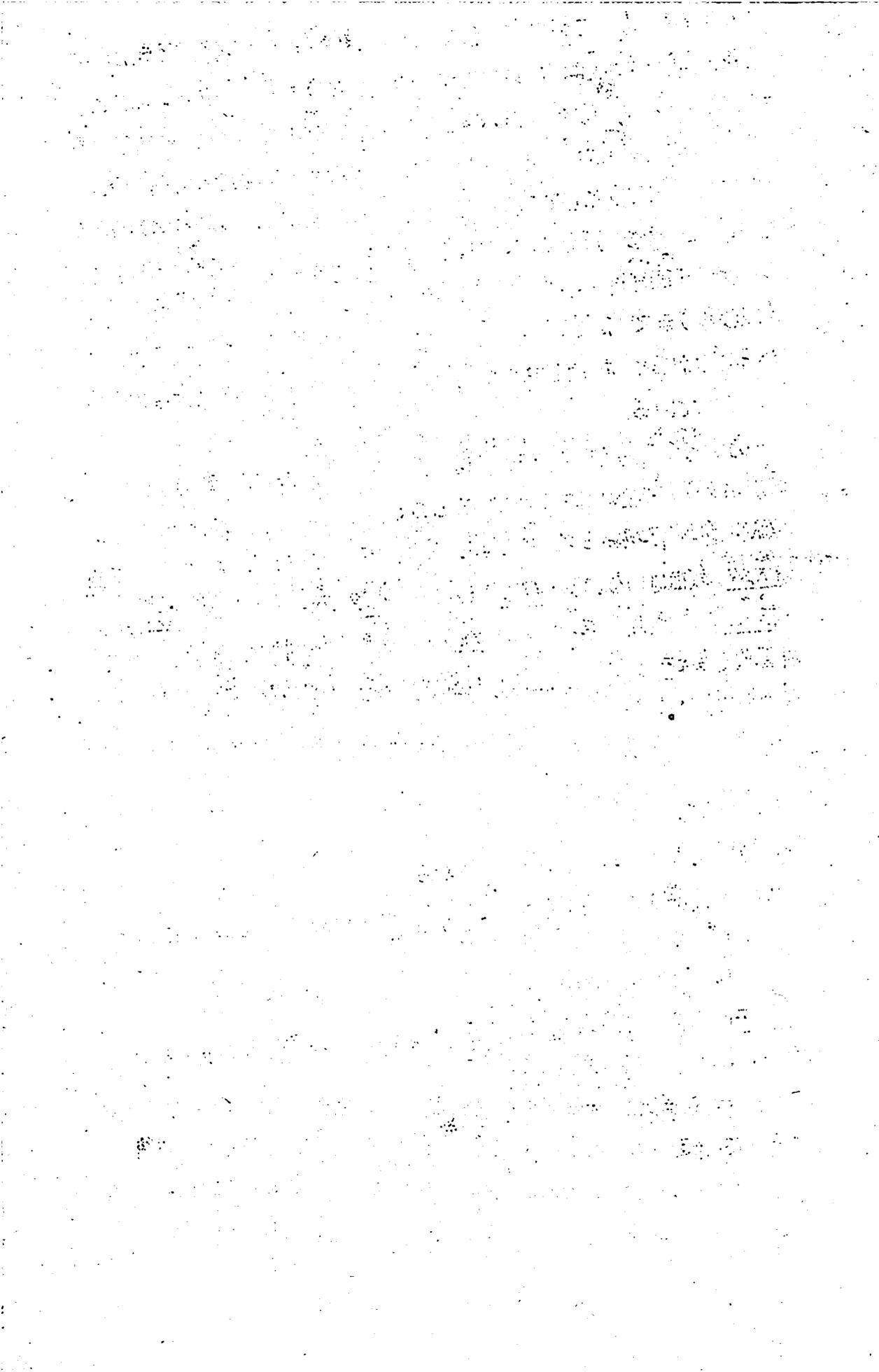
ア. カミ(上)に<sup>あ</sup> 在って尊ぶところから。

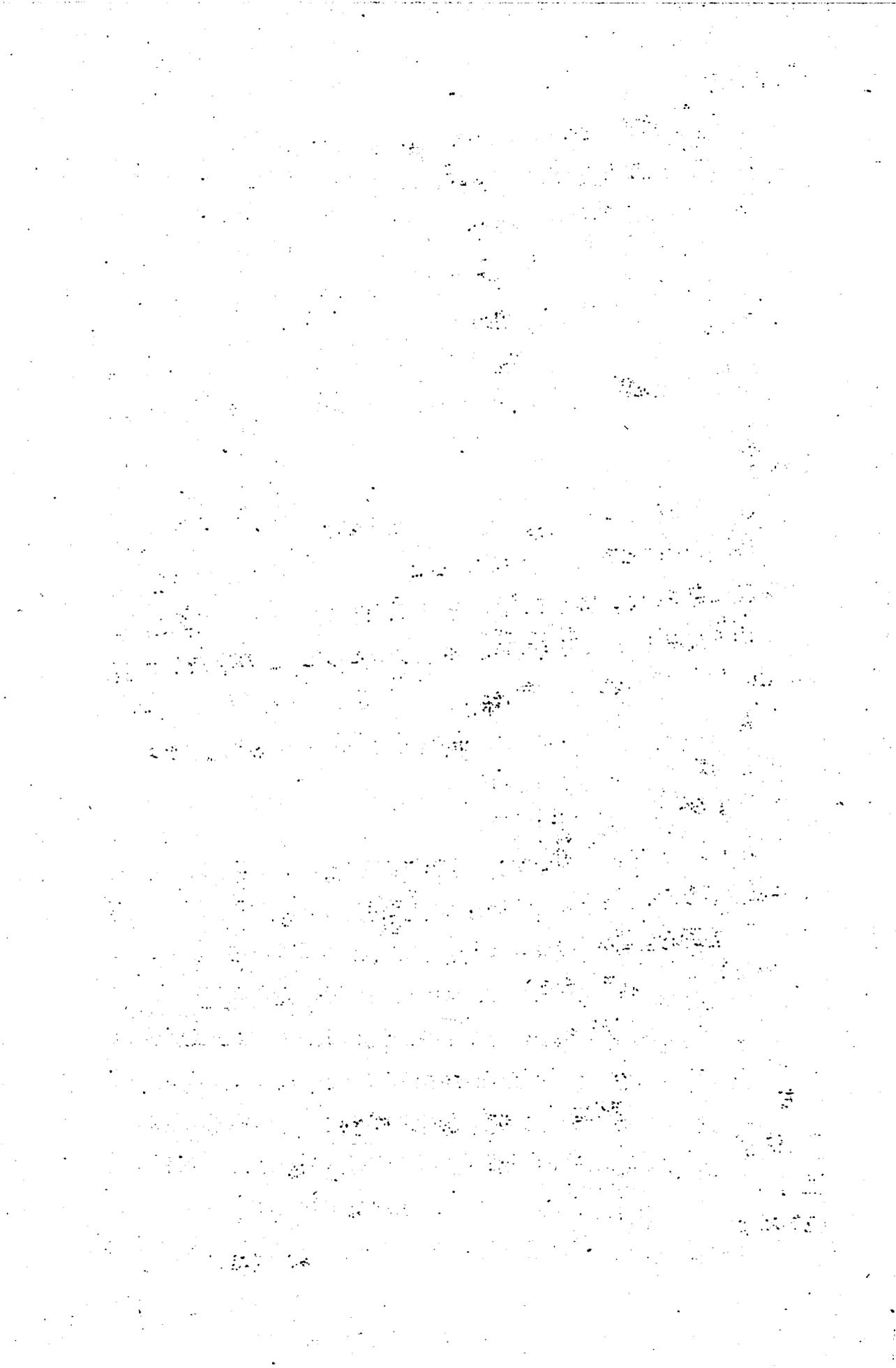
イ. 上を意味する原語カ(上)とミ(身)の結合語で、人の上に立つもの  
 の義から

ウ. カクリミ(隠身)の意から

エ. 古代、鏡に<sup>あまのつた</sup> 天照大神の像を<sup>あ</sup> 図し、それをもって<sup>あま</sup> 崇め奉ったところ  
 から カガミ(鏡)の略

その他にもまだある。例えば アイヌ語のカムイと同根であるとか、朝鮮  
 や蒙古(モンゴル)の「干」または「汗」と同源であるとする説など。





## 2. 両部神道

真言宗の教理に基づいてできた神道、すなわち、真言密教(真言宗)の金剛界と胎藏界の両部の曼荼羅に在る諸仏・菩薩等諸尊をわが国の神々にそれぞれあてた。例えば、金剛界の大日如來を伊勢の外宮の神、豊受大神、胎藏界の大日如來を伊勢の内宮の神、天照大神にあてている。伊勢神宮周辺の密教寺院を中心に成立し、室町時代に御流神道・三輪流神道の両流に分かれて発達し、江戸時代を経て明治まで密教寺院に伝えられた。真言神道・両部密合神道・神道密合教とも言う。

## 3. 山王神道

天台宗の教理に基づいてできた神道。山王とは比叡山の東麓にある日吉神社のことで、鎌倉末期に日吉神社信仰をもとにして天台宗の教理に基づいて比叡山で成立した。日吉山王の神をシャカ(釈迦)の垂迹とし(山王権現)、また天照大神と一体であるとした。この神道は比叡山に代々伝えられ、江戸時代初期、天海が出てこれをもとに山王一実神道を説いた。山王神道は天台神道・日吉神道ともいう。なお、山王の使いは猿であるという。

## 4. 伊勢神道(外宮神道・度合神道)

伊勢神社外宮の神主、度合氏の始めた神道。理論的な神道説として日本最初のもの。国家非常時であった元寇(元すなわち蒙古の日本侵襲)の頃、国民的自覚が高まる中で成立した。わが国は神国であるという神国思想がみられる。また、神道の理想を邪念迷想のなかつた神代(初代天皇の神武天皇以前の神々の時代)におき、人は正直清浄(正しくてすなおで、清くてけがれのなきこと)をもととして生活すべきだと説いている。発生は鎌倉時代初期で大成されたのは南北朝の頃。

## 5. 吉田神道 京都の吉田神社の神主、卜部兼信が唱える。卜部神道とも。

## 6. 吉川神道 吉川惟足が唱える。吉田神道の仏教的色彩を除いた。

## 7. 垂加神道 山崎闇斎が唱える。垂加は闇斎の別号。種々の神道説を集成。